

〈原 著〉

# 大学野球部における部員のコミットメントと心理的成熟の関係について

菊地 啓太\*・綿田 博人\*\*・中島 宣行\*

A study on the relationship between commitment and mental maturity of members of college baseball teams

Keita KIKUCHI\*, Hirohito WATADA\*\* and Nobuyuki NAKAJIMA\*

## Abstract

The purpose of this study was to examine the relationship between commitment and mental maturity in a college baseball team formed with many members. The survey was conducted on 364 male members from 3 college baseball teams. The questionnaire aimed to measure the commitment scale for the student baseball teams and mental maturity for athletes.

The results were summarized as follows:

- 1) The commitment scale for the student baseball teams consisted of five factors.
- 2) A high scorer of three factors —“clear meaning of sports activity”, “self-understanding”, “independent achievement orientation”— was high the score of four factors—role commitment, manager commitment, normative commitment, and adherence commitment—.
- 3) All factors of commitment were positively related to “clear meaning of sport activity”, and three factors —role commitment, normative commitment, and adherence commitment— were particularly related to “clear meaning of sport activity”.
- 4) It was shown that there were low positive correlations between “self-understanding” and the four factors of role commitment, manager commitment, adherence commitment, and human relations commitment.
- 5) Four factors —role commitment, manager commitment, normative commitment, and adherence commitment— were positively related to “independent achievement orientation”, and two factors —role commitment and normative commitment— were particularly related to “independent achievement orientation”.
- 6) It was suggested that “mental stability” and “physical controllability” were not closely related with either factor of commitment, but then “mental stability” was related to two factors, which were role commitment and human relations commitment.

From these results, it was suggested that commitment was related to mental maturity. Moreover, the possibility was suggested that commitment fluctuated depending on the changing process of mental maturity except “mental stability” and “physical controllability”.

Key words: commitment, mental maturity, college baseball

---

\* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科体育心理学研究室

Graduate School of Health and Sports Science, Juntendo University

\*\* 慶應義塾大学体育研究所

Institute of Physical Education, Keio University

## 1. 緒 言

野球はわが国において最もポピュラーなスポーツの一つとして発展してきた。1990年代以降、サッカーの台頭や娯楽の多様化などによって、長らく続

いてきた野球人気の衰えも指摘されてきたが、近年ではメジャーリーグにおける日本人選手の活躍や、ワールドベースボールクラシックでの連覇など、改めて野球という競技やプロ野球の存在感を印象づける事象が続いている。その一方で、野球草創期から中心的役割を担っていた学生野球は1950年代以降、プロ野球が隆盛をきわめたことにより、特に大学野球の人気は低迷の一途をたどってきたが、近年ではスター選手の登場により、再び注目を集めるようになってきている。

2009年度の全日本大学野球連盟<sup>30)</sup>の報告では、加盟校数、登録部員数ともに前々年度から漸増傾向にあることが示されている(表1)。全日本大学野球連盟に加盟する主要リーグのほとんどで1チームあたりの平均部員数が100名程度からそれ以上となっている(表2)。競技人口の確保に苦慮する競技も存在する中で、部員数が多いことや部員数の増加という現状は好ましいものと考えられるが、大所帯のチームが多数の部員に均等な活動機会を提供し、活動可能な時間や施設、あるいは指導者を確保することができているかどうかは疑問である。なぜなら、プロチームのように多数のスタッフを揃えることや

表1 加盟校数と登録部員数の推移

	加盟校数	総部員数	平均部員数
2007年度	370	20,147	54.5
2008年度	374	21,506	57.5
2009年度	377	22,382	59.4

(全日本大学野球連盟, 2009より作成)

表2 主なリーグにおける加盟校数と登録部員数

	加盟校数	総部員数	平均部員数
東京六大学野球連盟	6	734	122.3
東都大学野球連盟	21	1,549	73.8
首都大学野球連盟	15	1,400	93.3
関西学生野球連盟	6	633	105.5
関西六大学野球連盟	6	584	97.3
九州六大学野球連盟	6	597	99.5
福岡六大学野球連盟	6	637	106.2

(全日本大学野球連盟, 2009より作成)

十分な施設を整備することは大学野球では難しく、多くの部員を抱えるチームにおいては制約された条件下でその運営が行われていると思われるからである。つまり、部員数が増えるほどチームの活動への参加機会を限定される立場にある部員が増加しているものと推察され、これは部員数の増加の持つネガティブな側面の存在を示唆するものである。しかし、実際には退部者の数がさほど多くない。このように部員が辞めることなく、その数を増やしていること背景には何が存在しているのだろうか。

これまで、運動部活動については参加、継続、退部に関して様々な研究がなされてきたが、その中でドロップアウトという現象がこれらの鍵概念として注目されてきた。このドロップアウトには「スポーツによるドロップアウト」と「スポーツからのドロップアウト」があり<sup>28)</sup>、前者に関しては、とりわけバーンアウト・シンドローム(燃え尽き症候群)との関連が<sup>14)29)</sup>、後者に関しては中途退部要因との関連の研究が散見される<sup>2)3)</sup>。両者に共通するのは「なぜやめてしまうのか」という側面に注目している点である。これに対し、山本<sup>25)26)</sup>や山本ら<sup>27)</sup>は大学運動部に所属する競技者を対象とした運動部への参加動機について検討している。注目すべきは、対人関係が退部要因として挙げられてきた<sup>2)3)</sup>のに対して、対人関係が継続を促している可能性を示唆している<sup>25)~27)</sup>点であり、先行研究における退部要因が逆に継続要因へと転換している可能性を指摘している。また、退部によって種々の問題が発生することを避ける「回避」や、最後まで競技活動を続けることにこだわる「固執」、就職に有利であることが運動部参加の理由であるという「社会的有用性」といった、必ずしもポジティブとはいえない要因によって運動部への参加が規定されているケースが存在する可能性も指摘している<sup>25)~27)</sup>。このように、退部者がさほど多くないという現状の背景には、山本<sup>25)26)</sup>や山本ら<sup>27)</sup>の指摘するようなポジティブとはいえない要因が存在しているのではないかとと思われる。しかし、「補欠選手を運動部へと積極的に関わらせている独特な要因については明らかではな

い」<sup>26)</sup>と述べているように、補欠選手が積極的に関わる独特の要因の存在を示唆しつつも、それがどういったものであるかは言及されず、あくまでやむを得ず運動部に参加している要因を明らかにするとどまっている。補欠選手が大多数を占める大所帯のチームにおいてより良いマネジメントを行うために重要なのは、むしろ部員が積極的に関わる要因を把握することであると考えられる。

これらの先行研究を踏まえた上で、本研究では組織コミットメントに注目する。組織コミットメントは企業および企業に所属するメンバーを対象にしたものであるが、これをスポーツ場面に援用し、部員の所属を規定している要因のみならず、チームの活動に対する姿勢に影響を与える因子を明らかにすることで新たな知見を得られると考えられる。組織コミットメントとは「組織と従業員との関係の特徴づけるとともに、組織におけるメンバーシップの継続の決定に関して影響を持つ心理的状态」<sup>11)</sup>と定義され、Allen & Meyer<sup>1)</sup>が提唱するように感情的要素、存続的要素、規範的要素の3次元からなる概念として捉えられている<sup>11)19)</sup>。ここでいう感情的要素とは「組織への感情的な愛着、同一化、没入」<sup>11)</sup>と、存続的要素は「組織を離れる際に伴うコストの認知」<sup>11)</sup>と、規範的要素は「組織に残る道徳的義務の自覚」<sup>11)</sup>とそれぞれ定義されるものである。さらに個人がコミットメントを形成する対象としては組織以外に目を向ける「多重コミットメント」を想定することが必要であると指摘されており<sup>11)12)19)21)22)</sup>、さらに、組織コミットメントが注目される中で、どのような要因が組織コミットメントに影響を及ぼすのかということが重要な研究テーマとされてきた<sup>10)19)</sup>。

本研究では、コミットメントに関連する要因として「スポーツ選手としての心理的成熟」に着目することとした。杉浦<sup>16)17)</sup>は、スポーツへの参加動機がスポーツ選手の行動・心理を左右する中核的な心理的概念であるとし、スポーツ選手の参加動機の適応的な変化のプロセスこそが、スポーツ選手の動機づけの発達であり、スポーツ選手としてのパーソナリ

ティーの発達を意味するものであるとして、それを「スポーツ選手としての心理的成熟」としている。さらに杉浦<sup>17)</sup>は、この概念の実証的研究において、練習意欲や競技継続に関係する要因と、試合における実力発揮に関係する要因を抽出した上で、スポーツ選手が危機に直面し、さらに考え方を变化させることによって心理的成熟が向上する可能性があるとして述べている。ところで、この心理的成熟という概念は主に「なぜ競技を続けるのか」という側面に焦点が当てられたものであるが、コミットメントは「なぜ組織にとどまるのか」、「なぜ組織に没入していくのか」という部分に焦点を当てたものである。野球においては、上位のカテゴリーに進むにつれて競技人口が淘汰され、競技レベルの高い大所帯のチームにおいては出場機会をめぐる激しい競争が生じていることから、杉浦<sup>16)~18)</sup>の述べる参加動機に対する「危機」が特に多く存在していると思われる。一方で、そのような参加動機に対する危機を多様に孕んでいると思われるチーム内において、個人の立場に関係なくチームへの何らかの貢献を果たすことが求められ、そこでチーム内の競争とチームへの貢献という二律背反のジレンマを抱える部員は少なくないと思われる。コミットメントは個人と組織の関わりあいの程度を表すものであるが、個人が「なぜ競技を続けるのか」という側面は個人が組織にとどまることや没入していくことの以前に重要な側面であると思われ、心理的成熟がコミットメントについての重要な先行要因となりうるものと考えられる。また、杉浦<sup>16)~18)</sup>が指摘するように、部員は危機に直面しながらも考え方を变化させていく中で、自らの置かれた立場などとのコンフリクトを克服しながらコミットメントを醸成していくことも考えられる。

そこで本研究では、コミットメントと関連する要因として心理的成熟に焦点を当て、両変数の関係を検証することを目的とする。まず研究1において野球部における部員のコミットメントを測定する尺度を作成し、研究2においてコミットメントと心理的成熟との関係について検討を行う。そして、これらの分析を通して、部員のマネジメントにおいて、指

導者がより多角的な把握を可能となる指標を見出すことが最大のねらいである。

## 2. [研究1] 野球部における部員のコミットメント尺度の作成

### 2.1 方法

#### 2.1.1 調査対象

2006年度高校野球都道府県大会の上位校と大学野球中央リーグおよびそれに準ずるレベルの地方リーグ所属校に分類されるチームの部員を対象とした。今回の調査は、これに該当する高校2校に所属する男子部員86名、大学2校に所属する男子部員87名の合計173名を対象に行った。

#### 2.1.2 調査時期

2006年9月-11月に実施した。

#### 2.1.3 調査手続き

チーム側から調査の承諾が得られた後に、質問紙調査法によって実施された。無記名で回答を求め、回答の際には質問紙の回答結果が本研究以外の目的で使用されることはなく、回答者に不利益が生じることがないようにプライバシーは厳重に守られることを説明した。得られた回答はSPSS 10.0J for Windowsを用いて分析を行った。

#### 2.1.4 質問紙の構成

感情的、存続的、規範的の3つの要素から成る組織コミットメント、指導者、同僚、組織目標、役割、プレー、競技の各対象へのコミットメントを調査した。組織コミットメントについては企業に勤務する従業員向けにMeyer & Allen<sup>11)</sup>が作成したOrganizational Commitment Scaleの各質問項目(24項目)を適宜野球部の部員用に改変して使用し、さらに各要素や各対象に相応の野球部場面を想定した質問項目を加えた合計68項目を野球部における部員のコミットメント尺度の項目とした。「全く当てはまらない」の1から「非常によく当てはまる」の5までの5件法による評定尺度で回答を求めた。

### 2.2 結果

#### 2.2.1 度数分布および項目分析

有効データ173について、度数分布および項目分

析の結果から26項目を分析から除外することとした。これらの項目を除くことでItem-Total相関係数は $r = .31 \sim .73$ と高い数値を示し、信頼性が検証された。これは内的整合性が高いことを示している。

#### 2.2.2 因子分析

42項目で因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行い、解釈可能な7因子を抽出した。7因子の分散は41.36%を占めていた。いずれの因子においても因子負荷量0.35以上の項目を取り上げ、因子負荷量の低いその他の項目については削除した。さらに因子負荷量の高い項目の中から各因子の内容と適合しない項目を選び、削除した。その結果、7因子構造を持つ27項目を選出した。さらにこの27項目について因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行ったところ、因子の解釈と命名が可能であったのは第6因子までで、各因子の内容と適合しない項目を削除した結果、6因子26項目を選出した。6因子の分散は46.93%を占めていた。

#### 2.2.3 因子の解釈および命名

第1因子はチーム内における役割やその遂行によってチームに貢献することに対するコミットメントであることから「役割」と命名した。第2因子は指導者に対するコミットメントであることから「指導者」と命名した。第3因子はチームの目標やチームに対する忠誠など、規範的なコミットメントであることから「規範」と命名した。第4因子は野球という競技そのものに対するコミットメントであることから「競技への執着」と命名した。第5因子はチームからの離脱に対する認識やチームへの感情的なコミットメントであることから「感情」と命名した。第6因子はチームから離脱することに伴うコストの認知を表す存続的なコミットメントであることから「存続」と命名した。

野球部における部員のコミットメントとして、これらの6因子が得られたことで因子的妥当性が検証された。これは構成概念妥当性が検証されたことを示す。

#### 2.2.4 信頼性の検証

Cronbachの $\alpha$ 係数は第1因子で $\alpha = .81$ 、第2因

子で $\alpha = .83$ , 第3因子で $\alpha = .68$ , 第4因子で $\alpha = .76$ , 第5因子で $\alpha = .67$ , 第6因子で $\alpha = .66$ であった。第1因子, 第2因子, 第4因子ではいずれも.70以上であり, 信頼性が検証された。第2因子, 第5因子, 第6因子ではいずれも.70を下回っており十分な値とはいえないが, 尺度全体としては比較的高い信頼性が検証されたといえよう。

以上の結果から, 野球部における部員のコミットメント尺度の妥当性, 信頼性が検証された。

### 3. [研究2] 大学野球部における部員のコミットメントと心理的成熟の関係について

#### 3.1 方法

##### 3.1.1 調査対象

関東圏所在の私立A大学, B大学, 関西圏所在の私立C大学において硬式野球部に所属している男子部員364名を対象に行った。各チームは近年, 全国規模の大会に出場していることや, 日本代表に選出された選手が所属していることから, わが国の大学野球においては最上位の競技レベルにあると考えられる。被調査者の年齢は $20.0 \pm 1.3$ 歳であった。

##### 3.1.2 調査時期

2009年8月に実施した。

##### 3.1.3 調査手続き

チーム側から調査の承諾が得られた後に, 質問紙調査法によって実施された。無記名で回答を求め, 回答の際には質問紙の回答結果が本研究以外の目的で使用されることはなく, 回答者に不利益が生じることがないようにプライバシーは厳重に守られることを説明した。得られた回答はSPSS 10.0J for Windowsを用いて分析を行った。質問紙の構成は以下の通りである。

##### 3.1.4 使用尺度

野球部における部員のコミットメント尺度とスポーツ選手としての心理的成熟尺度を用いて調査を行った。なお, 両尺度は相互に独立した尺度である。

##### ① 野球部における部員のコミットメント尺度

部員のコミットメントを測定するものとして, 研

究1で作成した野球部における部員のコミットメント尺度を用いた。

##### ② スポーツ選手としての心理的成熟尺度

部員の心理的成熟を測定するものとして, 杉浦<sup>17)</sup>によって作成された心理的成熟尺度を用いた。この尺度は「明確な目的」, 「自己把握」, 「自律的達成志向」, 「精神的安定性」, 「身体的統制感」の5つの下位尺度からなり, 32項目の質問項目で構成されている。各項目について, 「1.全く当てはまらない」から「5.非常によく当てはまる」から1つを選択させ, 5段階評定に対して1-5点と得点化した。

#### 3.1.5 野球部における部員のコミットメント尺度の再検討

野球部における部員のコミットメント尺度は研究1において開発されたものであるが, 研究1では高校野球部員と大学野球部員の双方を対象としている。しかし, 研究2においては対象を大学野球部員のみとしており, 異なった因子構造になる可能性が考えられたため, 再度検証することとした。

#### 3.2 結果

##### 3.2.1 野球部におけるコミットメント尺度の因子分析

###### (1) 質問項目の妥当性の検証

野球部における部員のコミットメント尺度の各項目に対する回答についてItem-Total相関分析を行ったところ, 2項目で著しく低い相関を示したため因子分析から除外することとした。これらの項目を除外することにより相関係数は $r = .32 \sim .87$ という数値を示し, 質問項目の妥当性は認められると判断した。

###### (2) 因子分析および解釈と命名

野球部における部員のコミットメント尺度に対する回答について因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行い, 因子抽出基準を固有値1.00以上, 因子負荷量0.40以上としたところ, 5因子19項目が抽出され, 5因子全てにおいて因子の解釈と命名が可能であった(表3)。因子分析の妥当性を表す $KMO = .87$ により, 本研究における因子分析は有意であるといえる。

表3 コミットメント因子分析結果

因子	質問項目	F1	F2	F3	F4	F5	
役割 ( $\alpha = .79$ )	11. 仮に試合に出られなくても、チームに貢献するための役割を果たすべきだ。	0.68					
	26. 役割は、責任を持って最後までやり抜くべきだと思う。	0.66					
	23. 部員一人一人に何らかの役割があると思う。	0.62					
	20. チームメイトの助けになることのためなら、少々の犠牲は払っても良いと思う。	0.56					
	1. 試合に出て活躍すること以外に、チームの勝利に貢献できる役割があると思う。	0.50					
	18. このチームの目標達成のために頑張ることは、とても素晴らしいことだと思う。	0.49					
指導者 ( $\alpha = .86$ )	12. 指導ぶりが素晴らしいものであるから、このチームの指導者についていこうと思う。		0.81				
	2. 人格が優れているから、このチームの指導者についていこうと思う。		0.78				
	10. 監督やコーチの下で野球をやっているのが楽しいと感じる。		0.70				
	19. どんなことがあっても、監督やコーチについていこうと思う。		0.61				
規範 ( $\alpha = .69$ )	24. このチームは私の忠誠心に値する。			0.62			
	22. このチームは、私にとっての個人的利益がたくさんある。			0.51			
	17. 今現在、このチームにとどまることは、願望同然の必要なことである。			0.48			
	13. 私は一つのチームに忠実に残る価値を信じることを教えられた。			0.44			
競技への執着 ( $\alpha = .76$ )	7. 仮に怪我などでプレーができなくても、野球という競技に携わっていたいと思う。				0.92		
	5. どんな形であれ、野球に関わっていたいと思う。				0.58		
人間関係 ( $\alpha = .59$ )	4. 仮に今のチームを辞めたいと考えたとしても、チームメイトとの関係を考えると辞めないだろうと思う。					0.60	
	8. 仮に今のチームを辞めたいと思ったとしても、出身チームのことや人間関係などを考えると、簡単に辞めることができないと思う。					0.60	
	9. 監督やコーチに対しては、いつも忠実でなければならないと思う。					0.43	
		因子寄与率 (%)	11.39	11.24	7.80	5.81	5.76
		累積寄与率 (%)	11.39	22.63	30.43	36.24	42.00

第1因子は、「仮に試合に出られなくても、チームに貢献するための役割を果たすべきだ」、「役割は、責任を持って最後までやり抜くべきだと思う」など、自らの立場にかかわらず、チームの中で個人が担う役割を認識し、それを遂行する程度を表す因子と解釈できることから「役割」と命名した。

第2因子は、「指導ぶりが素晴らしいものであるから、このチームの指導者についていこうと思う」、「監督やコーチのもとで野球をやっているのが楽しいと感じる」など、指導者にコミットする程度を表す因子と解釈できることから「指導者」と命名した。

第3因子は、「このチームは私の忠誠心に値する」、「今現在、このチームにとどまることは願望同然の必要なことである」など、チームへの忠誠や、理屈抜きにチームにコミットする程度を表す因子と解釈できることから「規範」と命名した。

第4因子は、「仮に怪我などでプレーができなくても、野球という競技に携わっていたいと思う」など、プレーするのみならず、競技に関わる程度を表す因子と解釈できることから「競技への執着」と命名した。

第5因子は、「仮に今のチームを辞めたいと考えたとしても、チームメイトとの関係を考えると辞めないだろうと思う」など、他者との関係を表す因子と解釈できることから「人間関係」と命名した。

以上により、これら5因子を野球部における部員のコミットメントの下位尺度とした。高校野球部員と大学野球部員を対象とした研究1においては6つの因子が抽出されたが、最上位クラスの大学野球部員のみを対象とした研究2においては5つの因子が抽出された。なお、全ての因子において高得点ほどコミットメントが高いと評価されるものとなっている。

(3) 尺度の信頼性の検証

因子分析によって得られた各因子について Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、第1因子  $\alpha = .79$ 、第2因子  $\alpha = .86$ 、第3因子  $\alpha = .69$ 、第4因子  $\alpha = .76$ 、第5因子  $\alpha = .59$  という結果が得られた(表3)。第3因子、第5因子では  $\alpha = .70$  を下回っており、杉浦<sup>17)</sup>の心理的成熟尺度の信頼性との比較においてやや低い値もみられるものの、尺度全体としては概ね信頼性が検証されたと判断した。

3.2.2 コミットメントと心理的成熟の関係

(1) 心理的成熟の解釈

杉浦<sup>17)</sup>は心理的成熟尺度を構成する5つの下位尺度について、明確な目的、自己把握、自律的達成志向からなるものと、精神的安定性、身体的統制感からなるものと、大きく2つの要素に分け、前者は練習への意欲や競技継続に関係し、後者は試合での実力発揮に関係すると述べている。これらはともに心

理的成熟尺度を構成する要素であるが、杉浦<sup>17)</sup>の指摘の通り、これら2つの要素を照らし合わせると測定される概念が異なると思われた。そこで本研究では、明確な目的、自己把握、自律的達成志向を「自己理解」、精神的安定性と身体的統制感を「心身の安定」とし、以下の分析を行うこととした。

(2) コミットメントと自己理解との関係

明確な目的、自己把握、自律的達成志向の3つの下位尺度得点を合計した自己理解の得点をもとに、被調査者を高、中、低の3つのグループに分類し、これらを独立変数、コミットメント尺度における5つの下位尺度得点を従属変数として一元配置分散分析を行ったところ、全ての下位尺度でグループ間の差が有意であったため(表4)、さらに Tukey 法による多重比較を行った(図1)。

多重比較において各群間に有意な差が認められたのは役割、規範、競技への執着の各コミットメント因子であった。指導者では高群が中群、低群のそれぞれよりもコミットメントが高くなっていた。また、人間関係では有意な群間差こそ認められたが、その後の多重比較においては各群の間に有意な差は認められなかった。

(3) コミットメントと心身の安定との関係

精神的安定性、身体的統制感の2つの下位尺度得点を合計した心身の安定の得点をもとに、被調査者

表4 自己理解得点群別のコミットメント平均得点の比較

	高 (n=112)	中 (n=152)	低 (n=100)	F 値
役割	27.21 (2.71)	25.83 (2.99)	23.75 (3.35)	35.24**
指導者	13.53 (3.74)	12.12 (3.52)	11.93 (3.17)	7.04**
規範	15.14 (2.66)	13.88 (2.60)	13.03 (2.65)	17.44**
競技への執着	8.29 (2.10)	7.66 (1.97)	6.56 (2.16)	20.14**
人間関係	11.95 (2.73)	11.35 (2.31)	11.18 (2.11)	3.13*

上段 : M, 下段 ( ) : SD, \* : p < .05, \*\* : p < .01

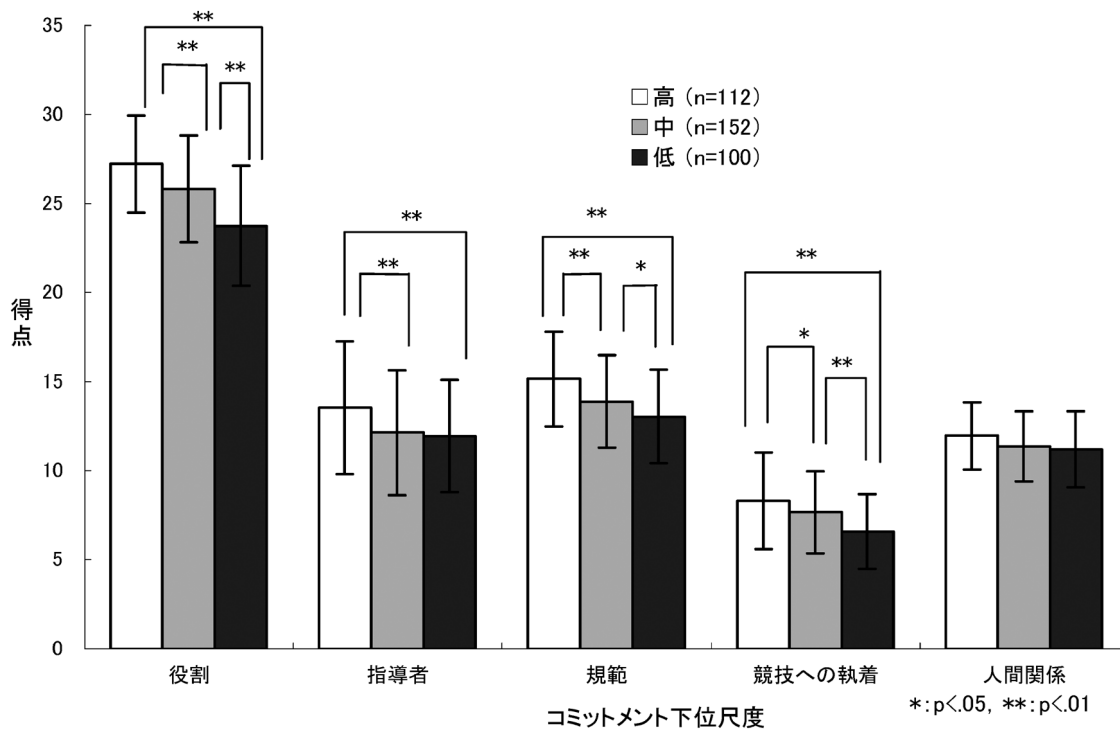


図1 自己理解得点群別のコミットメント平均得点比較

表5 心身の安定得点群別のコミットメント平均得点の比較

	高 (n=121)	中 (n=167)	低 (n=76)	F 値
役割	25.40 (3.66)	25.85 (3.03)	25.76 (3.22)	.67
指導者	12.48 (3.83)	12.99 (3.24)	11.45 (3.59)	5.04**
規範	13.97 (2.97)	14.28 (2.44)	13.62 (3.00)	1.55
競技への執着	7.35 (2.17)	7.81 (1.93)	7.30 (2.30)	2.44†
人間関係	11.22 (2.51)	11.65 (2.22)	11.54 (2.65)	1.14

上段：M，下段（ ）：SD，†：p<.10，\*\*：p<.01

を高，中，低の3つのグループに分け，これらを独立変数とし，コミットメント尺度における5つの下位尺度得点を従属変数とした一元配置分散分析を行ったところ，指導者においてグループ間に有意な差がみられたため(表5)，さらに Tukey 法による多重比較を行った(図2)。

有意な群間差が認められたのは指導者のみで，心身の安定における中群が低群よりもコミットメントが高くなっていて，また，競技への執着においては群間差の有意傾向が認められた。他のコミットメント因子において群間差は認められなかった。

### 3.3 コミットメントと心理的成熟の相関

大学野球部における部員のコミットメントと心理的成熟との関連およびその強さを検討するため，両尺度における下位尺度得点をもとに，コミットメントの各下位尺度と心理的成熟の各下位尺度間の Pearson の積率相関係数を算出した(表6)。

役割は身体的統制感を除く全ての下位尺度との間に有意な相関がみられ，規範は明確な目的，自律的達成志向，身体的統制感と有意な相関を示した。特に役割と規範においてそれぞれ明確な目的，自律的達成志向と関連が認められた。指導者は精神的安定性を除く全ての下位尺度との間に有意な正の相関が示されたが，全体的に低い相関であった。競技への執着は明確な目的，自己把握，自律的達成志向と有意な相関を示し，その中でも明確な目的との間には



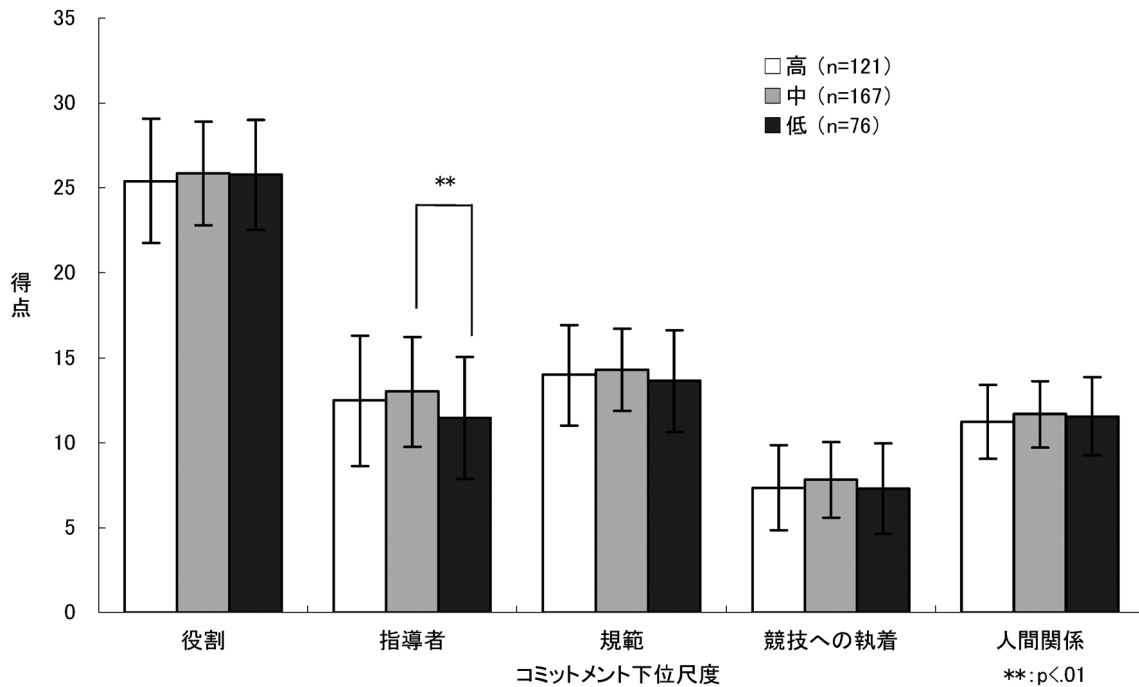


図2 心身の安定得点群別のコミットメント平均得点の比較

表6 コミットメント下位尺度と心理的成熟下位尺度の相関係数

	明確な目的	自己把握	自律的達成志向	精神的安定性	身体的統制感
役割	.44**	.18**	.34**	-.17**	.04
指導者	.13*	.11*	.23**	-.08	.16**
規範	.30**	.08	.37**	-.08	.16**
競技への執着	.39**	.18**	.26**	-.07	.05
人間関係	.14**	.19**	.07	-.15**	.01

\* : p<.05, \*\* : p<.01

中程度の相関がみられた。人間関係は自律的達成志向、身体的統制感を除く3つの下位尺度と有意な相関を示したが、いずれも弱い関連を示すにとどまっている。また、精神的安定性との間に低いながらも負の関連が認められた。

全体を通してみると、明確な目的が全てのコミットメント因子と正の相関関係にあり、自己把握、自律的達成志向が4つのコミットメント因子と正の相関関係にあることが示された。また、精神的安定性は役割、人間関係と低い相関関係にあったものの、いずれも負の相関であり、身体的統制感

関係を示した指導者と規範を除いて関連がみられなかった。

### 3.4 考察

#### 3.4.1 コミットメントと自己理解の関係

役割因子における項目からも分かるように、役割に対するコミットメントには付与された役割に対する責任を果たすかどうかという側面と、自発的に何らかの役割を見出し、それを遂行することの必要性を感じるか否かという側面がある。付与された役割に対する責任を果たすかどうかという側面では、自己理解が高い部員が何らかの役職に就くことで明確な役割を与えられていることが考えられるし、逆に責任を負うべき役割を付与されたことで自己理解が高まったということも考えられる。いずれも、個人とチームとを結びつける明確な役割が存在しているという前提である。しかし、自発的に役割を見出し、それを遂行する事の必要性を感じるか否かという側面は、明確な役割を負っているかどうかに関わらず、個人が役割に対して積極的に向き合うべきであるということである。つまり、自己理解の高い部員ほど、とにかく何らかの役割を見出して積極的に

チームに参与することを重要視しているという側面が強く浮かび上がってくる。また、規範においても役割と同様の結果で、自己理解が高く、能動的に活動している部員ほど理屈抜きにコミットしていることが示唆された。これらの結果からは、特に個人が組織にどう関わっていくかという側面を取り上げた役割と規範という2つのコミットメントについて、自己理解が重要な要因となっている可能性があるものと考えられる。

さて、役割に対するコミットメントや規範的なコミットメントと自己理解との関係を理解する上で、わが国の学生野球における指導現場の現状を鑑みずには考えることはできないだろう。指導者が野球を通じた教育を主眼に置いているという功力<sup>5)~7)</sup>の考察や、学生野球を「野球の実践を通じて、より人間性を高める修養の場として位置づけているようにみえた」<sup>9)</sup>という指摘があるが、その背景としては、武士道精神が強く反映されてきたこと<sup>8)23)</sup>や、そもそもわが国の野球の起点が学校という教育機関であるといった歴史的な経緯が考えられる。他にも、安部の「常に心身を鍛錬し、人間完成に努める修養が肝要である」<sup>4)</sup>といった考えや、飛田<sup>23)</sup>の「日本の学生野球は修養の野球」、「スポーツの目的が、精神の訓練にある」、「学生野球のコーチになると、技術的に造り上げるというよりも、これを人間的に造り上げねばならぬ」といった学生野球の在り方を形成してきた理念が挙げられる。さらに、日本学生野球憲章<sup>15)</sup>においても学生野球は「心と身体を鍛える場」であり、学校における「教育活動の一環として展開」されることによって「普遍的な教育的意味を持つものとなる」と定められている。これらの理念が浸透していることは渡辺ら<sup>24)</sup>が指導者の役割や指導の根本として「人間形成」、「心を鍛える」、「修業」といったものを挙げていることからもうかがえる。また、同様に渡辺ら<sup>24)</sup>が「集団のモラルの維持」や「チームのために何をするのか」という目的意識、「責任を必ず果たす」といった組織の中の個人の在り方から「支援グループを重用する」などベンチ外の部員への積極的なフォローにも言及している。こ

のことからは、安部の「無私と奉仕こそ野球競技には最も重要な心構えである」<sup>4)</sup>という考えや、飛田穂洲が「補欠もチームの一員であり、勝利に貢献しているのだと述べ、協同心を説いて」<sup>20)</sup>きた団体的精神を現代の指導者も重視していることがうかがえる。以上より、指導現場において野球という競技が教育的なツールとして強く認知されている<sup>13)</sup>ことに加え、指導者が「個人がチームのために何をするか」という視点を持つことや個人よりもチームにプライオリティーを置くことの重要性を指導しているものと思われる。その結果として自己理解の高い部員にあっては、個々の活動にのみ没入することをよしとせず、チームにおける自らの役割やチームそのものに対しても没入する傾向にあるのではないかと考えられる。その一方で、自己理解の低い部員については、役割やチームに没入できるほどに自身以外に関心が及ばない可能性が高いのではないかと推察される。もちろん、自己理解には個々の部員がチームの中でどのような位置づけにあるかということに対する理解も含まれており、自らの立場を明確に認識できればチームにどう関与するべきかという判断をしやすくなると思われる。しかし、それを背景から支えているのは既述のような指導の現状であると考えられる。

指導者では高群が中群、低群よりも有意に高くなっていた。自己理解が高い部員は能動的に活動を行っている可能性が高いと思われる一方で、自己理解が低い部員は漠然と部に所属し、受動的に活動を行っている可能性が高いと思われる。競技スポーツである以上は指導に叱咤が伴うことや、練習がハードな内容であることも想定され、部員にとっては精神的、肉体的苦痛を感じる場面は少なくないと考えられるが、練習を主とした日々の活動を監督し、部員を指導するのは指導者の役割である。つまり、自己理解の低い部員は受動的であるがゆえ、日々の活動について指導者に「やらされている」という認識がより強くなり、指導者に対するコミットメントが低くなっているのではないかと推察される。

競技への執着では自己理解が高い部員ほど、競技

に対して執着心を持っていることが示唆された。山本<sup>25)26)</sup>や山本<sup>27)</sup>は運動部への参加動機の一つとして競技活動への固執を挙げ、それが必ずしもポジティブとはいえない要因であるとしているが、競技に執着することがネガティブな要因であると考えられることは適切ではないと考える。確かに部員数が多くとも時間や施設は有限であり、勝利を追求する上では練習をはじめとするチーム運営には効率の良さが必要となってくると思われる。しかし、渡辺<sup>24)</sup>はベンチ外の部員に対してレギュラー部員のサポートにあたらせるだけではチーム運営は成り立たないと指摘している。また、多数のベンチ外の部員を活用するためには、多少の効率を犠牲にしても可能な限りパフォーマンスを試すチャンスあるいは練習の機会を与えることや、技術の優劣のみで部員から野球を取り上げることなく競技に取り組める環境づくりが重要であり、どのような立場の部員でも目的意識を持たせるべきだと述べている<sup>24)</sup>。さらに、後述するように競技への執着は自己理解の中でもとりわけ明確な目的との関連が認められている。明確化された目的と関連して競技に固執することは、多くの部員をチームの中で活用していくという運営方針においては、必ずしもネガティブな要因とはならないのではないかと考えられる。

さて、人間関係は主にチームから離脱することによってチーム内の立場や人間関係、出身校との関係などといった事象がマイナスに変化することを回避しているという、いわばネガティブなコミットメントである。多重比較においては有意な差が認められなかったが、群間差が有意であったという結果からは、自己理解の程度によって人間関係に対するコミットメントの程度が変わる可能性を否定することはできず、後述のコミットメントと心理的成熟の下位尺度間の関連についての検討において、人間関係が明確な目的、自己把握と低いながらも関連が認められている結果もそれを補完するものと思われる。しかし、これまで退部要因として挙げられてきた対人関係が、逆に継続を促しているとの指摘<sup>25)~27)</sup>もあることから、競技への意欲が低くても人間関係を重

視してチームにとどまる部員の存在を否定するには至らず、いずれにせよこの点は更なる検証の余地があると思われる。

### 3.4.2 コミットメントと心身の安定の関係

心身の安定との関係において有意な群間差がみられたのは指導者のみで、心身の安定が低い部員は指導者に対してコミットする程度が低い可能性を示唆するものと思われる。また、競技への執着において有意傾向が示されたが、自己理解との関係においてコミットメントの全ての下位尺度で群間差がみられたのに対し、心身の安定はコミットメントとさほど関係がないように思われる。

杉浦<sup>17)</sup>は、精神的安定性や身体的統制感といった心理的成熟が身体的能力と切り離せないものであると述べているが、これら身体的能力に依拠している要因が「なぜ組織にとどまるのか」、「どう組織に没入するか」という側面を表すコミットメントとは結びつきにくいと考えられる。それゆえ、心身の安定がコミットメントに対してあまり関係の強い変数ではないものと推察される。

### 3.4.3 コミットメントと心理的成熟の相関

役割、規範は明確な目的、自律的達成志向とそれぞれ中程度の相関を示した。この結果はコミットメントと自己理解の関係の項における結果と概ね合致するものであるが、やはり同様に学生野球の指導現場における指導者の指導理念が背景として考えられるだろう。

指導者は、精神的安定性を除く全ての下位尺度との間に有意な正の相関が示されたが、全体的に低い相関であった。コミットメントと心身の安定の関係の項では、心身の安定が低い部員において指導者にコミットする程度が低いという可能性が示唆されたが、精神的安定性が指導者とは無相関であるのに対し、身体的統制感と指導者の間には低いながらも関連が認められたことを踏まえると、試合における実力発揮に関わる要因の中でも身体的に充実していることと指導者にコミットすることが関連しているのではないかと考えられる。

競技への執着は明確な目的、自己把握、自律的達

成志向と有意な相関を示し、その中でも明確な目的との間には中程度の相関がみられた。山本<sup>25)26)</sup>や山本<sup>27)</sup>は競技活動への固執が、必ずしもポジティブとはいえない要因であるとしているが、この結果からは、ただ単に「何が何でも続ける」といったような形で競技活動に固執しているというよりは、競技の継続に対する何らかの明確な目的を持ちつつ競技に執着している面も少なくないと考えられる。

人間関係は自律的達成志向、身体的統制感を除く3つの下位尺度と有意な相関を示したが、いずれも弱い関連を示すとどまっている。また、精神的安定性との間に低いながらも負の関連が認められた。精神的安定性は周囲からの評価や成績に対するマイペースな考え方を示すものであるが<sup>17)</sup>、マイペースな考え方と人間関係に対する認識とが関係しているのかも知れない。ここでいう人間関係とは、チームメイトや指導者、出身チームやその関係者といった他者との関係を指す。また、人間関係に対するコミットメントが高い場合は、自己の志向や行動に関わる他者の存在を重要視しているということであり、逆に低い場合は自己の志向や行動に関して他者の存在を重要視していないということである。精神的安定性はあくまで周囲からの評価や成績に対する考え方を表すものであるが、自らの考え方や行動に関わる他者の存在を重要視するかどうかという点と無関係ではないと思われる。

さて、注目すべきは役割と精神的安定性の間に低いながらも有意な負の相関関係が認められた点である。しかし、役割が少なからず精神的安定性とネガティブな関係にあることが示唆されたことと早急に結論づけることはできないと考える。なぜなら、先行研究において杉浦<sup>17)</sup>は、精神的安定性が明確な目的や自律性といったものと必ずしも直接的につながるものではないと指摘し、精神的安定性が周囲からの評価や成績に対するマイペースな考え方を示すものであり、マイペースな考え方は練習などに対するやる気を減少させるのではなく「やる気の質」を変えるものであると述べている。これを踏まえると、役割と精神的安定性がネガティブな関係にあるというよ

りは、日々の活動における役割に対する認識の質が変容している可能性があると考えられる。一方で、上述の人間関係と精神的安定性の関係についての考察と同様、マイペースな考え方が他者との関わり合いに何らかの関連があるとすれば、役割に対する認識にも同様に負の関連があるのかも知れない。なぜなら、役割というのはチームという組織において、他の部員や指導者などといった他者との関係の中で与えられたり見出したりするものである。つまり、他者の存在があってこそその役割であり、周囲からの評価などに対してマイペースであるかどうかという点と無関係ではないと思われる。いずれにせよ、杉浦<sup>17)</sup>のいう「やる気の質」を区別しうる指標を検討するなど、さらなる検証の必要があると思われる。

#### 3.4.4 課題および今後の展望

特にコミットメントと関係の強い変数であった明確な目的と自律的達成志向が危機の経験による考え方の変化によって向上しやすい特徴であるという杉浦<sup>17)</sup>の結論を踏まえると、部員が何らかの葛藤を乗り越えながら心理的に成熟していくことで、チームの一員として没入していくといったように、コミットメントが変動する可能性もあるのではないかとと思われる。本研究ではコミットメントと心理的成熟の関係にのみ焦点を当てており、心理的成熟がもたらされるプロセスについてはもちろん、コミットメントが変化するプロセスにも言及していない。しかし、転機の経験を通して肯定的な自己や明確な信念に基づいた行動が可能になり、そういった心理的成長が困難な局面に対する耐性を持たせているという指摘<sup>17)</sup>からは、多くの困難な状況が待ち受ける大所帯のチームにあっても、部員個々の心理的成熟に伴ってコミットメントが変動する可能性が示唆されたといえるのではないだろうか。

チームの活動に対してポジティブなコミットメントと自己理解との関連が示されたことはチームをマネジメントするという観点からも非常に重要であると思われる。なぜなら、心理的成熟は危機や転機を経て、思考が変化することによってもたらされるものであるが、自然発生的に部員が危機や転機を迎え

て変化していくことを期待するだけでなく、部員が危機や転機を迎えている場合に、悩みや不安に耳を傾けることで心理的な成長を促した結果としてポジティブなコミットメントが強化されるのであれば、それは個人にとってもチームにとっても有益であり、指導者の果たすべき役割はその範囲まで及ぶべきであると考えためである。

本研究ではコミットメントと心理的成熟の関係に焦点を当てて検討してきたが、心理的成熟と部員の属性の関係を検討することで、心理的成熟に影響を持つ他の要因を探ることも必要であろう。また、コミットメントにおいても心理的成熟においても、継続的な調査を行うことによって時系列的な変化のプロセスを把握することも今後の課題として挙げられよう。

#### 4. 結 論

本研究では、大学野球部における部員のコミットメントと心理的成熟との関係について検討を行ったところ、以下の知見が得られた。

① 研究1において野球部における部員のコミットメント尺度の作成を試み、「役割」「指導者」「規範」「競技への執着」「感情」「存続」の6因子26項目が抽出された。さらに、研究2において使用した野球部における部員のコミットメント尺度を再度因子分析した結果、「役割」「指導者」「規範」「競技への執着」「人間関係」の5因子19項目が抽出された。

② 明確な目的、自己把握、自律的達成志向が高い部員ほど役割、指導者、規範、競技への執着の各コミットメントが高かった。

③ 全てのコミットメントと明確な目的との間に正の相関関係が示され、特に役割、規範、競技への執着が明確な目的と関連していた。

④ 役割、指導者、競技への執着、人間関係と自己把握との間に低い正の相関関係が認められた。

⑤ 役割、指導者、規範、競技への執着と自律的達成志向との間に正の相関関係が認められ、特に役割、規範が自律的達成志向と関連していた。

⑥ 精神的安定性が役割、人間関係と低い負の相

関関係にあったことを除き、精神的安定性、身体的統制感とコミットメントは関連していなかった。

#### 文 献

- 1) Allen, N. J. & Meyer, J. P. (1990) The measurement and antecedents of affective, continuance and normative commitment to the organization. *Journal of Occupational Psychology*, 63, 1-18.
- 2) 荒井貞光 (1983) 中学, 高校, 大学の運動部員の意識に関する調査研究. 広島大学総合科学部紀要Ⅳ, 1, 15-28.
- 3) 海老原修 (1988) 組織的スポーツからのドロップアウトに関する研究. 体育・スポーツ科学研究会編, 体育・スポーツ社会学研究7 現代スポーツを考える, 東京, 道和書院, 107-129.
- 4) 伊丹安広(1965)野球の父 安部磯雄先生. 第1版, 東京, 早稲田大学出版部.
- 5) 功力靖雄 (1999) 『野球部監督の指導理念等に関する意識調査』の概要について その4 クラブ活動のねらい. ベースボール・クリニック, 10(9), 56-61.
- 6) 功力靖雄 (1999) 『野球部監督の指導理念等に関する意識調査』の概要について その6 監督業の「魅力・生きがい」. ベースボール・クリニック, 10(11), 56-61.
- 7) 功力靖雄 (2000) 野球部監督の指導理念等に関する一考察—中学と高校野球の比較から—. 筑波大学体育科学系紀要, 23, 1-12.
- 8) 功力靖雄 (2004) 日本野球のルーツは“武士道精神”にあり!. 日本野球文化研究, 4, 70-76.
- 9) 功力靖雄 (2006) 野球部監督の指導理念等に関する一考察 —大学と社会人野球の比較から—. ベースボールジャーナル, 7, 106-135.
- 10) Mathieu, J. E. & Zajac, D. M. (1990) A review and meta-analysis of the antecedents, correlates, and consequences of organizational commitment. *Psychological Bulletin*, 108, 171-194.
- 11) Meyer, J. P. & Allen, N. J. (1997) *Commitment in the Workplace*, 1st ed., SAGE Publications.
- 12) Meyer, J. P., Stanley, D. J., Herscovitch, L. (2002) Affective, continuance, and normative commitment to the organization: A meta-analysis of antecedents, correlates, and consequences. *Journal of Vocational Behavior*, 61, 20-52.
- 13) 宮内孝知 (1974) 安部磯雄のスポーツ観. 早稲田大

- 学教育学部学術研究 教育・社会教育・教育心理・体育編, 23, 47-57.
- 14) 中込四郎・岸順治(1991) 運動選手のバーンアウト発生機序に関する事例研究. 体育学研究, 35, 313-323.
- 15) 日本学生野球協会(2010) 日本学生野球憲章, <http://www.student-baseball.or.jp/kenshou/pdf/charter.pdf>
- 16) 杉浦 健(1996) スポーツ選手としての心理的成熟理論構築の試み. 京都大学教育学部紀要, 42, 188-198.
- 17) 杉浦 健(2001) スポーツ選手としての心理的成熟理論についての実証的研究. 体育学研究, 46, 337-351.
- 18) 杉浦 健(2004) 転機を経験を通じたスポーツ選手の心理的成長プロセスについてのナラティブ研究. スポーツ心理学研究, 31(1), 23-34.
- 19) 高木浩人(2003) 組織の心理的側面, 第1版, 白桃書房.
- 20) 高橋豪仁(2002) 飛田穂洲の野球信念と物語の生成. 奈良教育大学紀要(人文・社会科学), 51(1), 99-108.
- 21) 高橋弘司(2002) 組織コミットメント. 宗方比佐子・渡辺直登編, キャリア発達の心理学, 第1版, 東京, 川島書店, 55-79.
- 22) 高尾尚二郎(1996) 組織コミットメントの多次元性—確認的因子分析による次元性の検討—. 慶應経営論集, 13, 33-52.
- 23) 飛田穂洲(1974) 学生野球とはなにか. 第1版, 東京, 恒文社.
- 24) 渡辺元智・岩井美樹・金光興二・松本 稔・杉本泰彦(2010) 高校, 大学指導者が語る「チームづくりとは」～全日本野球会議野球指導者講習会より～. ベースボール・クリニック, 21(3), 4-8.
- 25) 山本教人(1990) 大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較. 体育学研究, 35, 109-119.
- 26) 山本教人(1991) 正選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属様式. 健康科学, 13, 49-58.
- 27) 山本教人・金崎良三・南 貞己(1992) 大学体育大会参加者の運動部参加の動機. 健康科学, 14, 25-33.
- 28) 横田匡俊(2002) 運動部活動の継続および中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動. 体育学研究, 47, 427-437.
- 29) 吉田 毅・松尾哲矢(1992) スポーツ選手のバーンアウトに関する社会学的研究—社会学的概念規定への試み—. 体育の科学, 42, 640-643.
- 30) 全日本大学野球連盟(2009) 加盟校部員数推移, [http://www.jubf.net/info/plyernum\\_transition.html](http://www.jubf.net/info/plyernum_transition.html).

(平成21年11月24日 受付)  
(平成22年10月7日 受理)